

研究プロジェクト成果報告書（特別研究）

研究課題

「教科の本質を踏まえた教育課程の編成及び実施に関する大学院共通科目実践に向けた協働的研究」

研究期間 令和2年度～令和3年度

研究組織

氏名	所属・職名（専門）	役割分担
志村 喬	人文・社会教育学系（修士課程）教授（社会科教育）	研究代表者（研究総括，社会科教育学からのアプローチ）
岩崎 浩	自然・生活教育学系（専門職学位課程）教授（算数・数学教育学）	研究副代表者（研究総括補助，算数・数学教育からのアプローチ）
渡部 洋一郎	人文・社会教育学系（専門職学位課程）教授（国語教育学）	研究分担者（国語教育学からのアプローチ）
迎 勝彦	人文・社会教育学系（専門職学位課程）教授（国語教育学）	研究分担者（国語教育学からのアプローチ）
山田 貴之	人文・社会教育学系（専門職学位課程）教授（国語教育学）	研究分担者（理科教育学からのアプローチ）
茨木 智志	自然・生活教育学系（修士課程）講師（理科教育学）	研究分担者（社会科教育学からのアプローチ）
中平 一義 （研究協力者）	人文・社会教育学系（修士課程）教授（社会科教育学）	研究分担者（社会科教育学からのアプローチ）
安岡 卓行	人文・社会教育学系（修士課程）准教授（社会科教育学）	研究協力者（修了者・他大学教員養成担当者として協力）
長橋 俊行	人文・社会教育学系（修士課程）准教授（社会科教育学）	研究協力者（在学者・現職教員として協力）
山崎 誠		研究協力者（在学者・現職教員として協力）
浅妻 遼		研究協力者（在学者・現職教員として協力）

I：研究成果の概要

本研究は、専門職学位課程の共通科目領域「1 教育課程の編成・実施に関する領域」において、教科教育の本質をふまえた授業科目を実践するための理論的・実践的な知を協働開発することを目的とした。

全国に先駆けた本学の専門職学位課程では豊かな成果を蓄積してきた。令和4年度からは、修士課程の教科教育研究者も同課程に参加し、全国的にみて教科教育が充実した特色ある専門職学位課程が発足する。本研究プロジェクトは、両課程がこれまで蓄積してきた成果を踏まえたうえで新たな組織・課程の特色を、共通科目の授業実践で活かす理論知・実践知を協働的に生成することをめざし、両課程所属の研究メンバーが恒常的な情報交換・全体研究会等を通して共同研究を進めた。

その結果、参加メンバー全員で担当する授業（R4年度の共通科目領域1）「教科の本質を踏まえたカリキュラムデザインの理論と実践」のシラバス(下記)と教材資料を開発することができた。

専門職学位課程の共通科目領域「1 教育課程の編成・実施に関する領域」
授業科目名：教科の本質を踏まえたカリキュラムデザインの理論と実践
シラバス

授業科目名：教科の本質を踏まえたカリキュラムデザインの理論と実践	教員の免許状取得のための選択科目	単位数：2単位	担当教員名：渡部洋一郎，迎勝彦、岩崎浩，山田貴之、志村喬，茨木智志，中平一義 担当形態：オムニバス，複数
科目	教育の基礎的理解に関する科目		
施行規則に定める科目区分			
授業のテーマ及び到達目標 新学習指導要領にも明確に示されているように各教科にはそれぞれ固有の見方・考え方があり、教育課程の編成・実施においては、これを踏まえて行うことが求められる。本講義では、受講者が教科の本質を踏まえたカリキュラムをデザインするために必要な各教科教育学に固有の内容知・方法知を広げるとともに、各教科に固有の教師の専門性を高め、教師としてのアイデンティティをより確かなものとするを旨とする。			
授業の概要 教科の本質を踏まえたカリキュラムデザインの理論と実践に関して、以下に掲げる内容を中心に、国語科、算数・数学科、理科、社会科の各教科教育学の立場から、それぞれに固有の内容知・方法知を含む理論的・実践的研究に基づく講義を行うとともに、それに続くテーマ別のグループ探究を中心とした演習を行うことで受講者の理解と実践力の向上を図る。そのため、「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、受講者間の交流や協働を促すとともに、発表や質疑等を中心とするアクティブ・ラーニング型の授業を展開する。 前半（7回）は、オムニバス方式によって、7名の担当教員が次の授業内容を実施する。			

<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習指導要領と教育課程における各教科に固有の見方・考え方 (担当：岩崎浩，志村喬) ○ 教科に固有の見方・考え方を実現するカリキュラムデザイン (担当：迎勝彦，山田貴之，茨木智志) ○ 教科に固有の見方・考え方を踏まえた指導と評価の充実 (担当：渡部洋一郎，中平一義) <p>後半（8回）は、全担当教員が共同方式によってグループ別授業（グループ別討議）、全体授業（グループ発表、まとめ）を実施する。授業内容全体に関しては、授業のテーマやねらいが貫かれ、理論と実践の架橋・融合・往還を十分に担保できるよう、全担当教員が随時、連絡調整する。よって、担当教員により授業担当回数が異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式（7回）及び共同方式（8回）／全15回)</p>
<p>授業計画</p> <p>第1回：国語科における教材の読解と方法（担当：渡部洋一郎）</p> <p>第2回：国語科における過程志向的授業デザイン（担当：迎勝彦）</p> <p>第3回：算数・数学科に固有の見方・考え方：「デザイン科学」としての数学教育学の視座から (担当：岩崎浩)</p> <p>第4回：理科の見方・考え方を働かせて自然事象を捉えさせる単元構成と授業づくりのあり方 (担当：山田貴之)</p> <p>第5回：社会科・地理歴史科・公民科教育固有の見方・考え方とは何か（担当：志村喬）</p> <p>第6回：社会科・地理歴史科・公民科教育固有の見方・考え方を実現するカリキュラムデザイン (担当：茨木智志)</p> <p>第7回：社会科・地理歴史科・公民科教育固有の見方・考え方を踏まえた指導と評価 (担当：中平一義)</p> <p>第8回：グループ別探究（1）テーマの設定とグループ活動計画（担当：関係全教員）</p> <p>第9回：グループ別探究（2）関連する研究資料等の調査（担当：関係全教員）</p> <p>第10回：グループ別探究（3）調査結果の整理及び検討（担当：関係全教員）</p> <p>第11回：グループ別探究（4）まとめとプレゼン準備（担当：関係全教員）</p> <p>第12回：グループ発表と討議（1）グループ1、2による発表と質疑（担当：関係全教員）</p> <p>第13回：グループ発表と討議（2）グループ3、4による発表と質疑（担当：関係全教員）</p> <p>第14回：グループ発表と討議（3）グループ5、6による発表と質疑（担当：全教員）</p> <p>第15回：グループ発表と討議（4）グループ7による発表と質疑及び全体のまとめ (担当：関係全教員)</p> <p>定期試験は実施しない</p>
<p>テキスト</p> <p>各回の担当者が適宜提示をする。</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業中に適宜資料を配付する。</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>前半担当7名の教員によるオムニバス方式部分は、授業内で出される課題の提出内容によって評価を行う（20%）。また、後半の共同方式部分については、グループによる発表内容を評価する（20%）。最後に個々人に課される最終レポートを加味して総合的に評価する（6</p>

0%)。

また、授業に繋がる個別研究成果が参加者の各教科において進められ、次項に記す書籍(3編)・論文(7編)で全国的に発信された。具体内容は、各書籍・論文に委ねるが、例えば、国語教育の場合は、小学校において実施した検証授業の分析に基づき、書く過程における「思考力・判断力・表現力等」の育成についての教育方法を明らかにするとともに、幼児教育段階における「言葉」の獲得との関わりを視野に入れた方法論構築についての一試案を提示している。また、社会科教育の場合は、本プロジェクトに参加している社会科教育研究室教員及び同研究室を修了した大学教員・現職教員等の協働による中学校・高等学校の新学習指導要領に対応した教員養成用テキストの刊行、並びに小・中学校社会科教員向け月刊誌での現代的状況を踏まえた社会科授業づくりについて解説である。

これら個別研究成果らは、次年度担当授業での教材資料として活用されるものである。

II：研究成果の発表状況

【国語】

寺島徹・迎勝彦(2021)：創作と鑑賞の過程における「思考力・判断力・表現力等」の育成－幼保小における言葉の発達の検討と教育方法の開発－。金城学院大学論集人文科学編，第17巻，第2号，pp. 256-268.

【算数・数学】

岩崎浩，日野圭子，松尾七重(2021)：学会員の語りからみえる日本の授業研究の目的の多様性と重要な諸側面。日本数学教育学会(編)『算数・数学授業研究ハンドブック』(pp. 26-35)，東洋館出版社。

岩崎浩(2021)：指導計画を授業としてデザインし、実践する。溝口達也(編著)『新しい算数教育の理論と実践』(pp. 44-56)，ミネルヴァ書房。

岩崎浩(2021)：日本型算数教育のよさの継承と発展のために：算数の学習内容に「知識についての知識」の視点を。『初等教育』No. 129，新潟県小学校長会，pp. 11-14.

岩崎浩，井口浩(2020)：算数・数学の授業研究を研究として行う上で大事なことは何か。『第8回春期研究大会論文集』，日本数学教育学会，pp. 329-350.

【理科】

山田貴之・田代直幸・栗原淳一・小林辰至・他3名(2021)：プロセス・スキルズを精選・統合した「探究の技能」に基づく観察・実験等の類型化とその探究的特徴－中学校理科教科書の分析を通して－。理科教育学研究，第62巻，第2号(11月号)，pp. 497-511.

山田貴之(2021)：理科の見方・考え方を働かせた科学的探究－「探究の過程の8の字型モデル」と「探究アイテム」に着目して－。生物教育，第62巻，第2号(4月号)，pp. 103-104.

【社会】

中平一義・茨木智志・志村喬編著（2021）：『中等社会系教育研究』風間書房.

志村喬（2021）：アントロポセン期の社会科・地理教育. 社会科教育, 2021年10月号（通巻750）, pp.120-123.

志村喬（2022）：持続可能な地域・国土の形成を目指すー徹底解説：注目したい地理教育キーワード「持続可能な社会づくり」ー. 社会科教育, 2022年1月号（通巻753）, pp. 24-25.

Ⅲ：学校現場や授業への研究成果の還元について

上記のような研究活動・研究成果発表内容をもとに、令和4年度から新たに新設される専門職学位課程の共通科目領域「1教育課程の編成・実施に関する領域」において、本プロジェクトに参加した教員全員で担当する科目「教科の本質を踏まえたカリキュラムデザインの理論と実践」設置し、シラバスや使用予定教材等を開発した。したがって、プロジェクト成果は、次年度の本授業で実践的に還元されるものである。